

# 景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2013-03-01

## 目次

- 表紙  
色は内から  
／(写真・文) 吉田 慎悟
- 見開  
TDA NEWS  
第2回『杉並区まちづくり基本方針  
(杉並区都市計画マスタープラン)』  
の改定に伴う意見交換会の報告  
／桑田 仁・加藤 孝明
- 見開  
ランドスケープ事情  
「中国におけるランドスケープビジ  
ネスの動向」  
／戸田 芳樹
- 裏表紙  
景観文化Q&A  
シリーズ団地再生 その1  
／江川 直樹
- 裏表紙  
景観ビジネス最前線  
／東洋工業(株)
- 裏表紙  
ホワイト・ボード



写真：中国・山東省粘化

## 色は内から

10年程前に遼寧省の盤錦市の環境色彩計画を手掛けてから、中国の多くの都市を見た。中国では、今でも相変わらず大規模な都市改造が行われており、日本では考えられないような巨大な団地が、驚くべきスピードで建設されている。私達はそのような都市の地区別の色彩基準策定を依頼され、建築物や広告の色彩調整方法を提案してきた。中国では日本ほどきめ細やかな色彩調整は出来ないが、より速く、より多くの建築物のデザインコントロールが可能である。私達は真に個性的な景観を持つ都市景観を実現するために、その地域に蓄積された固有の色彩を注意深く読み取り、新しく建設される商業街区や大規模集合住宅に移植して育てようと試みてきた。しかし、現在の中国ではこのような地方色の発掘と展開はさほど重視されない。地域が育んできた独自の色彩文化よりも、近代的な表現や、あるいは欧州趣味により大きな魅力を感じるのだろう。新しさや海外の文化的な色彩に憧れることは、中国ばかりでなく、我が国でも同じようなことが行われてきた。景観法が施行された現在でも、このようなことが完全に改善された訳ではない。

地域の色彩は、新しい技術で簡単につくれるものではないし、流行のファッションに身を包むように、安易に着替えることも出来ない。まちは、地域固有の色彩を探り、その色彩を育み続けて行くことでしか真の個性を手に入れることは出来ないと思う。個性的な色彩は、その地の内にある。

中国の新しい都市は何処も同じような立派な近代的な景観を持つようになったが、まだ駆逐されずにまだ残っている農村の日常的な風景の中にある色が、地域の基調色として育ててほしいと思う。

TDA理事・色彩計画家 吉田 慎悟

## 第2回『杉並区まちづくり基本方針 (杉並区都市計画マスタープラン) の改定に伴う意見交換会の報告

東京の杉並区では区長が替わって「まちづくり基本方針」、いわゆる都市マスの見なおしが行われている。これをテーマに建築関係3団体（士会支部、JIA杉並、事務所協会）が共催する「都市マス意見交換会」が開かれた。お二人の先生の新しい視点からの講演があった。

TDA会員も参加したこともあり、その様子をご報告します。



「都市マス意見交換会」の様子

## 1 「杉並におけるコンパクトシティとは」



桑田 仁

芝浦工業大学デザイン工学部  
環境デザイン学科准教授

コンパクトシティとは、そのイメージが広く共有されているわけではなく、かなりあいまいな概念である。特に、杉並区のような都心周辺市街地におけるコンパクトシティとは何であろうか。ただ明らかなことは、それがどのようなものであれ、杉並における社会上、都市計画上の課題が解決の方向に向かうため、あるいは杉並の更なる活性化につながるために、地域の特徴を生かしたコンパクトシティを考えるべきである、ということである。

そこで、まずは杉並の都市形成の過程を振り返りながら、地域の特徴を整理しておく。最初の市街化は、関東大震災前後数年の間に、中央線と青梅街道に囲まれた荻窪-阿佐ヶ谷-高円寺近辺で急速に進んだ。そのためこのエリアでは、基盤整備をほとんど進めることができずに今日に至り、防災上も特に危険な地域として残っている。東京郊外部における道路ネットワークの不足は戦前より認識されており、1930年～43年にかけて、幹線・補助幹線を支える生活道路網ネットワークとして町村細道路網が計画されたが、ほとんど整備が進まないまま、オリンピック前後の都市計画道路の見直しで廃止された経緯がある。

緑地については、東京の緑地を初めて系統的に計画した東京緑地計画（1939）に



おいて、神田川沿いが放射状の緑地帯としてすでに位置づけられていたことが注目される。これに続く防空空地計画（1943）を経て、戦災復興計画においては、引き続き神田川沿いと和田堀公園付近一帯、および旧井草川から妙正寺川にかけて線状に緑地地域の指定がなされた。しかし、建ぺい率10%という厳しい規制は、都市化の圧力に抗することができず、最終的には神田川沿い一帯を「土地区画整理事業を施行すべき区域」とする代わりに、緑地地域は廃止された。とはいえ戦前から緑地を守る地域であった結果、企業グラウンドなどの大規模空地が、今日まで残ることができたといえる。

このような市街地形成は、都市計画上の問題を生じさせただけではない。地域資源を生み出すことにもつながっているのである。すなわち、①水と緑：旧井草川-妙正寺川、善福寺川、神田川といった河川や水路敷（旧上水・農業用水等）のネットワーク、②昭和初期前後の市街化進展時に建てられた建築物：洋館付和風・洋風、和風（歴史の舞台・農家・蔵・同潤会戸建）などである。

## ランドスケープ事情

## 「中国におけるランドスケープビジネスの動向」



歴史 無錫伯滬港泰伯文化広場／無錫の古い街並みと運河に面した公園で、やわらかな新しい風景を創り出した。



広大 大連医科大学／広大な敷地に建物を左右に配置し、遠く海を臨むダイナミックなランドスケープを創り出した。

中国の住宅開発の領域ではこの1～2年で市場が大きく様変わりしてきた。それは住宅バブルを心配した政府が市場に介入し、住宅を複数所有する富裕層の所有制限や、高額物件への価格指導をしたからである。これまでは建設すれば直ぐ売れるので、いかに早く建設するかがデベロッパーの競争であったが、今回政府が打ち出した所得倍増計画は対象が中低所得者に向けられており、その階層への販売の向上には時間が必要と思われる。

私達外国のデザイナーが手掛けるのは高額物件であるので、パイは当然縮小する。他の分野も視野に入れながら今後の戦略を考えなければならない。中国人は買い物が好きで、旅行も大好き、それとあと15年で高齢化社会に突入する事を考えれば、これからは商業施設、保養施設、福祉施設の3点は必須の施設となり、ランドスケープ分野の活躍の場も広がるだろうと期待している。

私は中国のプロジェクトを始めて8年ほどになるが、昨年秋、広東省珠海市のランドスケープ顧問に就任した。この市はマカオと陸続きで、近い将来香港とも橋で結ばれる好立地なエリアにある。現在、人口200万人を300万人にする大規模な計画を進めているが、開発を抑えた過去の政策により、良好な自然と景観が残されている。この市においてランドスケープからの提案は、残された自然をベースとしたバランスの良い生活空間の創出であろう。しかし、日本の様に継続性を重視している国とは違って、市のトップが替わると

以上のような経緯を踏まえつつ、杉並におけるコンパクトシティを考えてみよう。1990年代以降のコンパクトシティとは、持続可能で質の高い都市の空間形態として、主に、EU諸国で推進されている都市政策モデルである。ここで強調しておきたいのは、「持続可能」という視点である。交通拠点の高密度化を図ることのみがコンパクトシティではないのである。「持続可能性」という観点から、①緑地の保全と拡充、②超高層型建築形態のコントロールの必要性の議論、③南北方向道路網の充実に際しては、沿道の建築形態のコントロールが必要となるのではないかと。さらに④歴史的建築物の維持管理等、地域資源の活用を進めることが、空間の質を高めることにつながると考える。

**2 「これからの防災まちづくり」**

**加藤 孝明**  
 東京大学生産技術研究所 都市基盤安全工学国際研究センター 准教授

**モデルチェンジすべき時**

失われた20年を経てすでに社会のモデルチェンジは待たなしの状態である。時代は「山を登る時代」から「山を下る時代」に入っている。一つの理想像を描き、それを目指す時代ではない。各地域の特性を即したそれぞれの方向を目指す時代になったと言える。防災まちづくりにおいても、今までの定型から発想を転換し、独自の新しい地域づくりモデルを構築していくという姿勢が重要である。

**防災まちづくりの基本**

最近の（少なくとも私の周りで）防災まちづくりの合言葉がある。。「幸せに生きる方法は二つある。知っている幸せと知らない幸せだ」。もちろん「自然災害の危険性を」である。

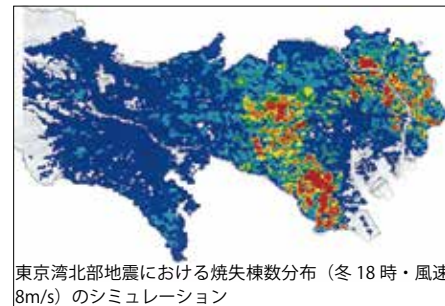
地域社会全体が「知っている幸せ」を感じている状況を創り上げることが防災まちづくりの第一歩である。

3.11以降の災害の切迫性を煽る情報が氾濫する中、落ち着いた社会的議論を通して防災まちづくりが目指すべき安全水準、目標像について議論すべきである。

**東京の災害危険性への対応**

過去50年近く前、東京の地震に対する脆弱性が指摘されて以降、避難場所の整備、延焼遮断帯の整備、建物の不燃・難燃化と着実に防災施策は展開され、市街地の安全性は高くなっている。一方で、50年前の郊外部では土地の細分化によって建て詰めが進み、相対的に都市計画道路の整備率が低いと、結果として地震火災の危険性は外延化した。2011年4月に公表された最新の東京都の地震被害想定によれば、建物被害約30万棟、火災被害約19万棟という甚大な被害が報告されている。延焼危険性だけをみれば、下町よりも山の手密集住宅地の方が大きい。

一方、水害についても、本来、都市計画も担える役割、担うべき役割は実は多い。地下貯水槽をはじめとする河川管理側だけが対策ではない。水害リスクに晒される地域の低密度化、或いは、中高層化等、浸水



東京湾北部地震における焼失棟数分布（冬18時・風速8m/s）のシミュレーション

しても被害がでにくい市街地像を志向することは可能である。雨水が浸透しやすい市街地を形成する等、ハザードを制御することも可能である。今後確実に気候変動は進む。数十年後を見据え、今こそその布石を打つべき時期である。

**復興への備え**

東日本大震災からの復興の教訓の一つは、「復興の準備」はできるということである。災害は都市づくりにおける不連続点である。被災者の生活の連続性を考えつつ、不連続点を次の時代の都市づくり活かすという発想も重要である。事前に議論を重ね、被災に備えることが重要である。



この「都市マス意見交換会」は行政の方も出席頂いたから、実は両先生の講演のあと私も「中杉通りの南進問題」を事業費の可能性も算出の上、沿道型住宅による防災帯計画を提言した。環七・環八間の3.5kmにも及ぶ間に南北に通ずるまともな道が貫通していないからだ。133号という補助線である。この道が計画されたのは1928年だと思うから、85年もの間放っておかれているのだ。（最終段：曾根 幸一）

戸田 芳樹 ランドスケープアーキテクト・(株)戸田芳樹風景計画 代表



にぎわい 瀋陽長白万科城 / 住宅の一階部は店舗となるケースが多く、広場には消費者を誘導するアイキャッチとしての装置が求められる。



高級 蘇州棠北別墅 / 高級感を売り物とした別荘地。人工島を造成し一般住宅地とは別世界を演出している。

計画が大きく変更される政治風土に振り回される危険性もあるので注意が必要だ。

いずれにしても中国には発展する広い国土と多くの人口があり、未来の都市に対する国民の願望がある。そのフィールドに参加出来るチャンスがあるならリスクを掛けても進出すべきで、その結果若いランドスケープアーキテクトの活躍の場が少しでも作れたら本望であると私は考えている。以上、民間の開発と政府の計画について簡単に述べたが、最後に中国ビジネスについて、私自身への戒めも含めて注意事項を述べてみたい。

- ・見積りにあたっては、無理して下げる事は絶対しない事。中国社会ではネットワークが発達しているので、他のクライアントまで情報が流れる可能性がある。
- ・契約して前途金が支払われるまでは成果品を渡してはいけない。提出すると支払いが止まる可能性がある。
- ・スケジュールは言いなりになってはいけない。基本的に厳密なスケジュールは無く、交渉すれば変更が可能である。
- ・報告の後は必ず意見書をもらう事。後で気が変わるケースが往々にしてあるから確認しておく必要がある。
- ・請求は早め早めに行う事。とにかく支払いは遅くなるので、諦めず毎週のように連絡する事が必要である。

Question : 団地再生と都市景観との関係で重要な点は？

Answer

1. 場所の声を聞く

財政、環境をはじめとする様々な要因から、団地の再生は、建て替からストック活用へとその視点が大きく変わろうとしています。一方、昨年は、我が国のインフラの老朽化とその維持の問題が特に顕在化しました。団地ストックの再生問題は、実際にそこで暮らしている住民にとって、また地域のまちづくり上からも重要な課題であり、住民、市民がともに考えながら進めなければいけない問題です。その中でも、景観は、見える生活環境そのものですから、景観を軸にした議論が重要だと思うのですが、住宅の問題を議論する際に、そういった視点が希薄な感じがしています。私は、建築（でも土木でも）を考える際に、「場所の声を聞く」ことが最も重要だと思っており、「場所と人の共生」を考えたいと思うのですが、これまでは、どうしても“経済の声”を聞きすぎていたのではないのでしょうか。

2. 親街路性

さて、「団地」は、レジデンシャル・イン・パーク（公園の中の住棟）の典型ですが、欧州等の団地再生事例では、それらの街路型への転換が図られています。治道性の重要さが再認識され、再生ガイドラインの重要な要素となっています。私は、以前から、「親街路性（＝建築と道ゆく人が親しい関係を持てること）」の獲得が重要だと提唱しています。道行く人が、治道に住んでいる人の人気（ひとけ）を感じつつ、どこからか見られているという感じを持てることこそが安心安全な街の基本要素ではないでしょうか。欧州の事例を調べても、当初から治道性の高い住宅地は持続性の高い集住環境となっていることがわかります。わが国の団地再生事例でも、建替団地の事例ですが、西宮市のUR浜甲子園団地さくら街は、「親街路性」によるタウンスケープの創出が目標とされ、結果、多くの賞を受賞していますが、なかでも、景観に関心の高い市民グループが、唯一市内で選定した建築景観賞を受賞しており、「親街路性」が住民、市民に受け入れられていることがわかります。ストック活用の中で、いかにこの親街路性を創出していくかが重要な視点だと思います。



(写真) 親街路性が目標とされた「さくら街」

ホワイト・ボード

■ Facebook開設

この度、『景観文化研究会』という名称のFacebookを開設し、さまざまな景観問題の情報交換ができる場を設けましたので<<http://www.facebook.com/keikanbunka>>を活用してください。

■ 絵葉書の制作販売

現在、都内のある地域の魅力を紹介するスケッチ絵葉書の制作販売の話を進めています。これから、さらにこのアイデアをいろいろな地域に展開したいと考えていますので、関心のある自治体や観光協会、または商店会等からのご相談ご依頼をお待ちします。



人に、環境に、未来に彩り。  
それは、“より良い快適”を創る仕事。

当社は、住まいの外部空間をつくる「エクステリア」と、公共の施設や道路など景観をつくる「ランドスケープ」のふたつを基軸に多彩な商品を展開しております。これからも絶えずチャレンジを続け、未来へ快適をお届け致します。

TOYO 東洋工業株式会社

本社 〒760-0055 香川県高松市観光通1丁目2-14  
TEL (087) 862-5411 (代) FAX (087) 862-5418  
E-mail: head\_office@toyo-kogyo.co.jp

東北営業部・盛岡出張所・仙台営業所 関西・北陸営業部・大阪営業所・金沢営業所  
関東営業部・関東営業所・埼玉営業所 中国営業部・岡山営業所・広島営業所  
中部営業部・名古屋営業所・神奈川営業所 四国営業所  
九州営業部・福岡営業所・鹿児島営業所

URL: <http://www.toyo-kogyo.co.jp>

編集後記

色彩の話で巻頭文を吉田慎悟さんをお願いしたら、ランドスケープ事情の戸田芳樹さんの中国と重なる偶然が生じ、まさに文化と景観の立体的紙面が生まれた。また、小さな意見交換会からではあるが、景観形成の新しい視点を読者の皆様にお届けできたと思う。さらにQ&Aでは建設から半世紀がたつ団地の再生にともなう景観的諸問題を何回かに分けて、江川直樹さんお願いする事にした。ご期待下さい。